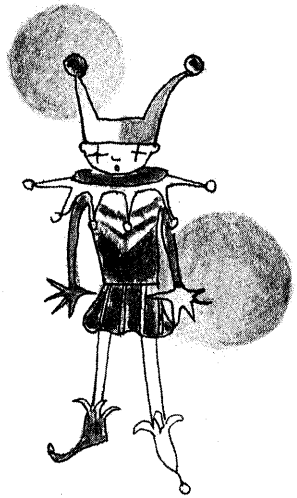


Mくんと私

吉岡 晶子



四月に三歳児の担任になりました。私にとっては
はじめての三歳児、一人一人と向き合う毎日、驚
きやとまどい、発見の日々でした。

Mくんは三月生まれの三歳になりたてのほやほ
や、クラスの中でも体が小さく、歩き方もまだヨチ
ヨチした感じが残っている子でした。入園して間も
ない頃は、一人でしゃがんでレールを黙々とつない
では電車を走らせたり、園庭にすわりこんで砂利を
いじったり、ままごとコーナーでテーブルの上にお

皿を並べたりしていました。「先生、先生」と呼ぶ
声はあまりありませんでした。

五月になり少し幼稚園に慣れて来ました。Mくん
は、時々「先生」「こっち来て」と私に声をかける
ようになりましたが、しばらくすると、あらあら、
またやられたと、つい思いたくなくなることを次々とや
るようになったのです。ブロックや他のおもちゃが
たくさん入ったカゴを次々にザーンとひっくり返す
のです。そして私の方をチラッと見るのです。帰る

時になると、きれいに片付いたままごとのお茶わんやお皿をあちこち散らかしたり、ボールをいくつも外に投げたりもしました。私は、「こわれるからもうやめましようね」「使えなくなっちゃうね」とか「大変大変ひっくり返っちゃった。拾いましよう」などと言いつつ「私は試されているのでは？」という思いでおもちゃを拾い片付けていました。そのうちMくんの顔を見ているとまたやりそうだというのがわかるようになりました。私をチラッと見たり、「ほく、今からやるぞ、どうだ」という表情になるのです。そして私が駆けつける、という日が何日も続きました。Mくんはめっちゃくちゃにすることを楽しんでるのか、私を呼んでいるのか。でも危険を伴いそうな時には何はさておき止めなければなりません。迷いながらの日々を送っているうちに夏休みを迎えました。Mくんの「ひっくり返し」は少しずつ減って来ていました。

二学期がはじまりました。第一日目、Mくんは私

のスカートをつかんで離さず、ずーっとそばにいました。「先生あのね、Mちゃんね……」と夏休みの楽しかったことを話してくれました。おもちゃをひっくり返したり倒すこともありません。これは調子の良いスタートと思っているうちに、しばらくしてからドキッとする言葉を聞くことになりました。

「先生」と呼ばれて行くと「先生きらい、あっちへ行って」と言うのです。「まあ、先生はMくんのこと大好きなのに……」と言いつつ何か邪魔したかしらとか何か言いすぎたことがあったかしらなど思いました。それからは度々この言葉を聞かされました。友達に砂利を投げているのを止めれば「先生きらい」、水道の水を出して周囲を水浸しにした後始末をしても「先生きらい」。砂場で遊んでいる時に袖口を上げようと近づくと「先生あっち行って」なのです。でもそう言いながら手を出して私にされるままになっていました。されることがいやだったのでなく、近づいてくる人は「ほくに何か言いに来るの

か”という警戒の気持ちだったのでしょうか。袖口が濡れようとそーっと見守り、Mくんのしたいようにさせた方が良かったのでしょうか。それまでに、それほど声をかけたり手を出したつもりはなかったのですが、Mくんにとっては余計なことが多かったのでしょうか。「Mくん面白そうね」とか「Mくん、すごい」などの声にも、口癖のように「あっち行って」ということもありました。誉め言葉も認め言葉も彼にしてみれば必要なく、そーっとしておいて欲しかったのかも知れません。つい先を見越して先走ったかわりをしていたのかと反省し、危険なこと以外は見守ることにしました。

この頃、母親に対しても同じ様に「あっち行って」と追い払ったり、「ママきらい」を連発していました。自分がしていること、しようとすることをさげすむものをことごとく排除していたのでしょう。彼の小さな抵抗でした。それでいて遊び相手は私で、「先生、遊ぼう」と呼ばれるのですから複雑

でした。

そして十月。「先生きらい」が少なくなりました。「先生(きらい)……」と続きそうにもなっても言いません。自分に都合の悪いことを言われると私を手で打つことがあります。数回私を叩くうちにだんだん力が弱まりそのうち気分を変えて「先生、お山に行こう」と言ったりするので。突然頭を私にぐいぐい押しつけてくることもあり、私も一緒に押したり引いたりお相撲になります。

ダンボールの電車が今のMくんの宝物。「きょうは丸の内線」「きょうはブルートレイン」と毎日変えて遊んでいます。「先生、乗ってよ」「先生、この駅で待って」「先生、遊ぼう」と声がかかります。今後、Mくんと私の歴史はどうなっていくのやら……。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)